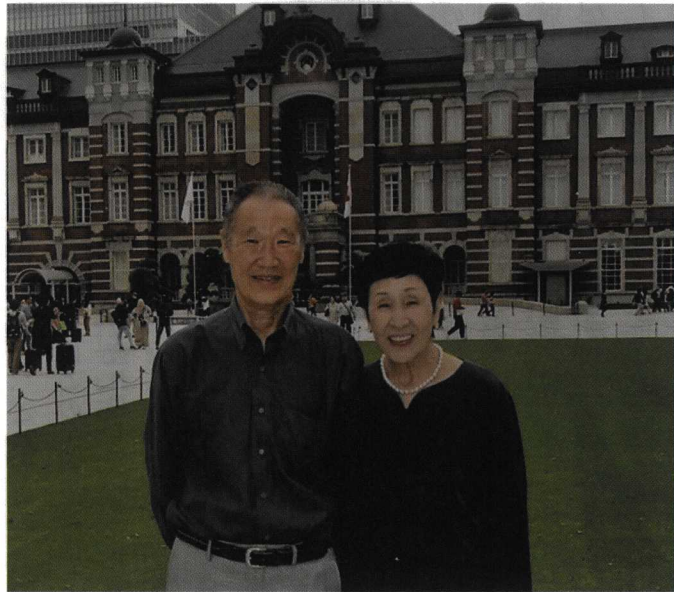


イエス様、私を弱くしてください

小々馬 亜彦



妻の真理子さんと

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからです。(2コリント 12:9-10)

私たちは、自分が弱っている時、誰かに助けてほしいと思います。弱さは、人間が助け人を必要としていることを教えてくれます。

私は「何のために生きるのか、誰のために生きるのか」ということをずっと考えていましたが、結論が見いだせないまま、どうせ人間はいつか必ず死ぬのだから人生は楽しく生きなければ損だと、短絡的、利那的(たんらくてき、せつなてき)に毎日を過ごしていました。問題が起これば自分の力で



解決して弱さは絶対に見せない、これが男の道だと考えていました。しかし、次第にこの生き方に虚しさを感じるようになり、すっかり疲れ果てていました。

ある時、聖書をパラパラめくっていると不思議な言葉に釘付けになりました。それが冒頭のコリント人への手紙第二のみことばでした。

救われる以前は、強さこそ自分が自分らしく生きる力であり、弱い自分を想像することなどできませんでした。しかし、驚いたことに聖書は人間の価値は弱さの中にあり、弱い時が一番強いと言っているのです。強い自分であり続けることが生きる目標だったのに、自分の弱さを誇れるという聖書の教えは絶対に受け入れられないと思いました。そんな裸の王様のような私を見て、イエス様は繰り返し「降参しなさい」と語り続けられていたのです。

降参するには、「私は弱い人間だからイエス様の力が必要なのです」とイエス様に乞うことが必要条件だ

と考えましたが、これは私には無理な注文だと思いました。しかし、不思議なお方イエス様は、時間をかけて私自身が自分の弱さを知るように仕向けられ、その弱さの内にイエス様が完全に現れ「私が弱い時こそ、私は強い」というみことばを示されました。この時私はイエス様に降参しました。

私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。

(2コリント 12:5)

初めて吉祥寺キリスト集会に導かれたのは一九九〇年五月、四十六歳の時でした。翌年の秋に旭川のキャンプで受洗しました。救われた時の気持ちを思い出すと、長い間この世をさまよい満身創痍の自分が、やっといエス様の御手の中に憩うことができるのだ、という喜びで心は溢れていました。

私が、信仰に導かれたのは、単なるもののはずみで

はありませんでした。自分から救いを求めたかのように

に思っていましたでしたが、事実はそうではなく、救いはイエス様から一方的に与えられた賜物だったのです。

イエス様は私が心に言い知れぬ渇きを感じるようにと仕向けられ、長い間、愛に飢えた哀れな男の救いを忍耐強く待ち続けておられたのです。人生の節目節目に私に触れ、語りかけてくださり、私がイエス様を無視する心とイエス様に背こうとする心を砕いてくださったのです。

ルカの福音書の放蕩息子^{ほうとうむすこ}の話には、家を飛び出した息子を日夜案^{あん}じる父親の姿が描かれています。このように、イエス様は私のことを絶えず心に掛けてくださりイエス様の元に帰り着くその日が、一日でも早くくるよう待ち焦がれていたことがはつきりわかりました。

今、私がこうして生かされているのはただイエス様のあわれみによるものです。

あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は

神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。(1ペテロ 2:10)

私は一九四二年十月、八人兄弟の末っ子として東京の台東区谷中^{やなか}に生まれました。当時は私のような大家族は珍しくはありませんでした。

戦争末期、東京の下町はB-29による焼夷^{しょうい}弾爆撃を受け、見渡す限り焦土^{しょうど}と化してしまいました。幼かった私は、変わり果てた街の光景を少し覚えていました。幸い、私の家は戦災^{まぬか}を免れました。

父は小さな会社を経営していたので、我が家は経済的には恵まれていました。

両親は、末っ子の私をとて可愛がってくれました。兄のお下がりではなく新しい洋服を着せてくれ、欲しい物は何でも与えてくれました。

周りの友達はこの私を羨^{うらや}ましがっていたので、い

つも優越感に浸っていました。

父は忙しく留守が多く、母は子供の教育が苦手であまりばかり目が向いている人でした。家族が多いので楽しい家のはずなのに、それぞれが勝手な方向へ歩んでいる家庭には温かさはありませんでした。

兄や姉から年が離れていた私は、家では遊び相手がいなくていつも一人ぼっちでした。両親に手を引かれてどこかへ連れて行ってもらったという記憶もありません。だから友達が嬉しそうに親と一緒に外出する姿を見ると、とても羨ましく、自分もあの子のような温かい家庭に生まれたかった、と寂しい気持ちで一杯でした。

私にとって一番悲しいのは、両親の仲が悪く、いつも口論が絶えないことでした。父は酒を飲むと人が変わってしまいました。母と口論する時は、決まって酒を飲んでゐる時でした。父は会社の仕事や人間関係で大きなストレスを抱えていたようで、そこから逃れる

ために酒に助けを求めていたのです。母と口論を繰り返し、母を責める父の姿を見るのが辛く悲しく、そんな時は部屋の隅に逃げて泣いていました。その父親の姿がずっと脳裏に焼き付いているので、私は今も酒を好みません。

酒さえ飲まなければ、世界一の父親でした。留守がちだった父が家にいる時は、片時も離れず父の後を追っていました。父の手は大きく温かくいつも私を包んでくれました。父のぬくもりと優しさが大好きで、本当に父っ子でした。大人になるまで、父に叱られたという記憶はありません。

このような家庭環境に育った私は、当然のように頼りになるのは自分だけ、自分のことは自分でやるという気持ちが強くなり、親は必要な経済的援助をしてくれれば良い、と考えるようになっていました。

自己中心で負けず嫌いな私の性格は、幼い頃に育った家庭環境が大きく影響したことは間違いありません。

ある本に子供の性格は幼児期に既に形成されている、と書いてありました。私はその見本だと思いました。

両親は教育にあまり熱心ではなかったので、私が学校で何をしたとか、友達とどこへ行ったかなど、話をすることはほとんどありませんでした。学校からの書類には自分で押印して提出していました。進学の時も誰に相談することなく、自分で高校、大学を選び、決めていました。人に頼らず、自分を信じて行動することに全く不安はありませんでした。

大学生になって、改めて自分の前には何と自由な世界が広がっているのかと思いました。流行っていたアイビールックの服を着てキャンパスを闊歩し、恰好よいという理由だけでラグビー部に入り、我が青春を謳歌していました。

父が、入学祝いに自分の使っていた車を譲ってくれたので、車通学をしていました。同期生はそんな私を見て羨ましがっていました。しかし、それは外見だけ

のことで、本当の自分は、愛に飢えた寂しく哀れな人間で、それを知られたくないために少しでも自分を良く見せようと見栄を張っていたのです。その姿はまるで舞台上で踊る道化師のようでした。自分が人より優れていると思う時、言いようもなく傲慢になり、少しでも劣っていると思うと、すっかり落ち込んでしまい、このことが私の心にいつも重くのしかかっていました。

何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。
(ピリピ 2:34)

学生になって四か月が過ぎた時、六十七歳だった父が突然世を去ってしまいました。いつものバーのいつもの席で、酒のグラスを手にしたまま眠るようになくなりました。脳卒中でした。自由奔放に生きてきた父

らしい最期でした。神から遙か遠いところをさまよっていた父のすべては、死によって完全に消え去りました。父はこれで長い苦しみから解放されて安らかな眠りについたに違いないと思い、父を失った悲しみや喪失感はありませんでした。この時、私はまだイエス様を知らなかったので、死はすべての終わりだと考えていました。

近くにクリスチャンの家族が住んでいて、いつも家族が一緒で、私を見ると笑顔で声をかけてくれました。クリスチャンはみんな良い人なんだと、自分とは別世界にいてその家族の温かさに憧れ、いつか自分もあなりたいと叶わぬ夢を描いていました。しかし、自分のような傲慢な人間がクリスチャンになれるはずがないと、なかばあきらめてもいました。それでも、もし救われることが許されるならば、救われたいと願う自分でしたが、このことは口が裂けても人には言えませんでした。

私の心の中には二人の異なった自分が住んでいて、一人は正しい道に進もうとしているのに、もう一人はそれとは逆の方向に行こうとして「クリスチャンのよいうな甘っちょろい人間になつてはだめだ。もっと強くなれ」と言っているのです。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。
神があなたがたのことを心配してくださるからです。

(1ペテロ 5:7)

二十二歳になり、自分が決めた会社に就職して晴れて社会人になりました。数年後には生活が安定したので結婚を考えるようになりました。

小さかった時の悲しい思い出はすべて捨て去り、笑いに溢れた温かい愛ある家庭をつくりたいと願っていました。

しばらくして、同じ職場の女性との出会いがありました。

した。温かで優しさ一杯の、私が心の中に描いていたようなクリスチャンホームで育った女性です。初対面で、この女性とならばきつと望んでいる家庭が築けると確信しました。私は小さい時から誰に相談することなく自分で物事を決めていたので、ぐずぐずすることは性に合わず、すぐに結論を出したがりです。

日ごとに結婚への願望が強くなり、知り合ってまだ数か月なのにそのことを彼女に話しました。私のような自己中心的で思いやりに欠ける者が、彼女の結婚の対象になることなどあり得ないだろうと思いつつも、勇気を出して自分の思いを伝えました。

彼女がクリスチャンではない私の申し出を受けてくれるだろうか、勝算の見込みなどありませんでしたが、何と彼女は私の申し出を受け入れてくれたのです。きつと彼女には私をイエス様に導くという使命感があったからだと思います。

結婚する前に、彼女の父親が私に言った言葉がずっと

と頭から離れませんでした。クリスチャンの父親は、「結婚は男にとって本当に大事なことですから、よく考えて決めなさい」と言われたのです。自分の娘のことより、私のことを心配してくれる彼の心の広さに感動して、いつか自分もあのような寛大なクリスチャンになりたいと思いました。この時から私は少しずつイエス様に引き寄せられていたのです。

結婚生活は幸せでした。しかし、これは私が勝手に思い込んでいたことで、妻は言葉には出しませんが、信仰に全く関心を示さなかった私と、心の一致が無いことを悩んでいたのです。私は妻の気持ちを理解できなかったわけではありませんが、まだまだやりたいことが山ほどあったので、自分のことばかりを優先して妻の心の内など考えませんでした。

妻に対しては、「定年退職したら信仰について考えるよ」などと、人生の重要な問題を後回しにするような不謹慎な態度をとっていました。これほど不誠実で

6人の証し

Unser Herr lebt

不遜な態度はないでしょう。これを妻がどんなに悲しい思いで聞いていたか、それを考えると自分の傲慢さに嫌悪感を覚え、本当に申し訳なかったと思います。

会社では仕事を精力的にこなして順調に昇格していました。しかし自信過剰で飽きっぽい性格の私は現状に満足できず、海外に出て新たな仕事に挑戦したいという思いが強くなりました。これを実行するために海外の就職先を決め、現地へ行って住む家を探して、いよいよ会社を辞める準備ができた時、妻にこの計画を打ち明けました。しかし、この提案は即拒否されてしまいました。私としては完璧な計画だと自信満々でしたが、今振り返ると、あの計画が成っていたら今の私はなかったと思います。もし、海外に出ていたら当然救われることなどなかったでしょう。だから、妻があの計画を拒否してくれたことを本当に感謝しています。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。

後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっていきます。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

(1ヨハネ 3:2)

一人息子は、米国のペンシルベニア州にある全寮制のメノナイト高校に留学、その後ニューヨークの大学を卒業、更に三年間勉強を続けていました。

息子は小さい時から妻と一緒に教会に行っていたので、信仰は私よりずっと先輩です。

妻は年に数回、長期間ニューヨークの息子のアパートを拠点に、友人を訪ねたり、大学の講座などを受けて過ごしていました。その間、私は東京に一人でした。世間の煩わしい雑事から解放された生活は快適でした。小さい頃から何事も自分のことは自分で行っていたので、妻が不在でも何不自由ない生活をしていました。

しかし、夜になると何か満たされない虚しい気持ちになることがありました。そんな時、教会へ行ってみようと思いました。そこは結婚式を挙げた杉並の教会で、少しは身近に感じていたので久しぶりに訪ねてみようと考えたのです。ただ信仰のことはこれっぽちも考えていませんでした。

教会へは聖書が必要なので本棚にある聖書を探すと、そこに吉祥寺キリスト集会の住所と地図が書かれているメモが挟んでありました。しかし、このメモはとても不自然でした。なぜなら妻はこの時既に吉祥寺集会へ行っていたので、メモなど必要ないはずです。何故メモがあるのか、それは妻が私を吉祥寺集会へ行かせようとするために書いたメモで、妻がわざと目立つようにそれを聖書に挟んでいたのだと思いました。

何度も書きましたが、私は小さい時から人から強制されることが大嫌いで、自分の意志にそぐわないことは絶対にしませんでした。このことを妻は知っている

ので、言葉ではなく、あえてメモに残したのだと思いました。つまり、それは私を集会へ行かせるために妻の願いが込められたメモだったのです。今までの私だったら「その手に乗るものか」とメモは即ごみ箱行きでしたが、妻の気持ちを考えるとメモは捨てられませんでした。後でわかるのですが、もしあの時メモを捨てていたら、私が吉祥寺集会へ行くことは無かったでしょうし、もし妻が家にいたら、私は吉祥寺集会には行かなかったはずです。

これこそイエス様のご計画に違いありません。一九九〇年五月の日曜日の朝、メモを持って電車に乗りました。途中吉祥寺駅に停車した時、ドアが閉まる直前に私は無意識に電車から飛び降りていました。そもそも杉並の教会へ行くつもりだったのが、突然吉祥寺駅で降りていたのです。訪ねようとしていたのは吉祥寺キリスト集会ではないのです。この時もイエス様は私に必要な布石を敷かれていたのです。

6人の証し

Unser Herr lebt

メモを頼りに集会にたどり着くと、すでに大勢の人が席を埋めていました。空いている席を探していると、見知らぬ男性がやって来て、前の方の席に案内してくれました。周囲の人が皆握手をしてくれましたが、見ず知らずの私に名前も言わずにただ握手するとは、こは一体どういう人の集まりかと少し心が動揺しました。しかし妻が通っている集会なので、悪い所ではないはずだと自分を納得させました。

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをあらかじめ備えてくださったのです。
(エペソ 2・10)

初めての吉祥寺キリスト集会は何が何だかわからなのまま終わりました。家に戻ると、このことを真つ先にニューヨークにいる妻に知らせたく電話をしました。

妻は本当に喜んでくれ、私も涙が止まりませんでした。

それから私は集会へ集うようになりました。私が長い間抱いていた思いは、イエス様のみ前で、いつの日か妻と息子と一緒に祈ることだったので、やっとこの願いがかなえられる時が来たと本当に喜びました。自分の意志で物事を行えば、結果の責任は自分で取ればよいだけのことです。もし、妻に言われてやったとすれば、何かあったときその責任をきつと妻に押しつけるに違いありません。ですから、妻が長い間家を留守にしたことは私にとって本当に幸いでした。たった一枚のメモが私を信仰に導くきっかけになったという不思議なことは、イエス様のご計画に違いありません。

その後、私がニューヨークの息子を訪ねた時には息子の前で祈ることができました。息子は父親の変わりように驚きながらも心から喜んでくれました。今まで彼とは信仰の話など一度もしたことが無かったのに、この時は信仰について長い時間語りあいました。涙も

すっかりぬぐわれ、イエス様への感謝で心は満たされ、イエス様の元に家族の一致が生まれたことで幸せな気持ちになりました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。
(ペリピ 4・6)

母は九十歳で長寿を全うしました。最後の一年間は老衰で入院していました。母は私が信仰を持っていたことを喜んでくれていたので、病室では一緒に祈りをしました。母のやせ細った腕と手を握ってお祈りしていると、昔、母が父や家族のことで辛い目にあったことが頭をよぎり、もつと早く、母にやさしく手を差し伸べてあげるべきだったと後悔の念で一杯になりました。

私の人生を振り返る時、愛に恵まれず、寂しく辛い

時を過ごしたという苦い思いがいつも心にあり、自分は被害者だと考えていました。しかし、母を前にして祈っていると、私が大変な間違いを犯していたことに気づかされました。今まで、自分だけが愛に恵まれない人間だと考えていたことが、何と自分勝手で、的外れだったかを教えられたのです。

当然のことですが、人は自らの出発点を、自分の意志で選ぶことはできません。生まれてみたら、そこに両親がいて、日本人であることも男か女であることも、自分で選んだわけではありません。生きる時代や場所も自分で選んだわけではありません。両親でさえ、私の誕生に関与することはできません。だから親の愛が無かったなど両親に責任を転嫁することは大きな間違いなのです。

本当に愛が必要だったのは私ではなく両親だったのだと気づかされました。子供の頃は一人ぼっちで本当に寂しかった、しかし、「その気持ちは父も母も同じ

だったのだよ」と私を戒めるイエス様の声が聞こえたのです。

親の気持ちなど全く考えずに、自分だけが犠牲者だったと錯覚していた私は何と卑しい人間だったのか、自分の恥ずかしさだけが残りました。

愛が欲しいと願っていたあの時、実は両親の愛は、私にしっかりと届いていたのです。ただ私がそれに気づかなかっただけなのです。愛が私に必要だったように、両親にも愛が必要だったのです。私が受けた悲しみや苦しみは、イエス様が私に「愛の尊さ」を知らしめるための試練だったと思わざるを得ません。イエス様はすべてご存じだったのです。未熟だった私に、イエス様は両親を通して本当の愛の価値を教えてくださいましたのです。イエス様は何と長い時間この時を待たれていたのでしょうか。

見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの

城壁は、いつもわたしの前にある。(イザヤ 49:16)

病室で母と二人で祈っている時も、イエス様の愛は母に注がれていることを感じました。「アーメン」と言う時の母の表情は、穏やかで平安そのものでした。

人生の最後にイエス様に出会った母は、今までの苦勞をすっかり拭い去られ、幸せに包まれていたに違いありません。母の苦しみはイエス様の苦しみでもあったと思い知らされました。

定年の時、会社から二年間特例で勤務を延長することができるのでこれを受けるかと、打診されました。当時、企業の定年は六十歳で、雇用延長はあり得ない時代でした。せっかくのオファーなので、「二年間ならやってみようか」と受けました。しかし、一度は定年で会社を去ると決めていたので、どうも仕事に身が入りません。このままでは会社に迷惑をかけると考え、四か月後には辞表を提出していました。

会社人間だった私は、人生の主は会社であり自分でしたが、今はまことの主であるイエス様に従い、キリスト者としてふさわしい生き方をすることが最大の務めだと思っています。

その後二年間、東京の専門学校と大学で講師をしました。

六十五歳の時、静岡の企業から航空会社立ち上げの要員として招かれ、二年間静岡で勤務し、それから航空関連の専門学校の副校長として三年、計五年間静岡で単身生活を送りました。この年になつての単身生活はさぞ侘しいだろうと思っていました。静岡での生活は恵みに溢れていました。

それまで、静岡についての知識など何もありませんでした。住んでみるとこの地が豊かな大自然に囲まれた温暖な気候で、そこで育まれた素朴で温かな人達、豊富な食べ物、そして静かな街等々、都会人間の私が忘れていた多くの恵みがありました。

部屋の窓からは駿河湾と富士山の大パノラマが眺望できました。毎朝これを見てみると、宇宙を創造されたイエス様への畏敬の念が湧きあがりました。この素晴らしい大自然を目の当たりにするだけで心が豊かになりました。

妻と離れた静岡の生活でしたが、イエス様にある心の一致があるので、むしろ一緒に住んでいた時よりも深い絆で結ばれ、相手を思いやり、より感謝する気持ちが強くなっていました。妻は時々訪れて来たので一緒に静岡の生活を楽しみました。

何よりも幸いだったことは、静岡には礼拝も家庭集會もキャンプもあり、妻も参加しての信仰による兄弟姉妹との豊かな交わりに恵まれ、イエス様がいつも私たちのそばにおられることを実感し、信仰生活の素晴らしさを存分に味わいました。

私は年齢的に季節でいえば「冬」に生きていると思っています。冬の静けさの中でイエス様を仰ぎ見る時、

6人の証し

Unser Herr lebt

窓の外の枯れたように見える木々には冬芽に蓄えられ

た命が宿り、凍った地面に目を凝らせば、わずかに顔

を出して懸命に生きようとしている可憐な青い芽を見

つけます。そして、そこに息づくすべての植物、生物に

イエス様の輝く光が注がれていることを感じます。

私の心にも溢れんばかり輝く光が注がれ、心は主にある喜びに溢れています。厳しい冬だからこそ、イエス様の光がまぶしく輝いて見え、イエス様を仰ぎ見る喜びがあります。

十九世紀の説教者アンドリュー・マーレーは『神を待ち望め』という著書の中で「今すぐにこうべをたれて御前に静まりなさい。そして神の光にあなたの内を照らしていただくために、神を待ち望みなさい。謙遜な信仰をもって、『神は光です。太陽の光よりも無限に輝かしく麗しい光です』と言いなさい」と書き残しています。何と力強く、何と勇気づけられる言葉ではないでしょうか。

主よ。私のたましいは、あなたを仰いでいます。

(詩篇 25・1)

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。

(詩篇 34・5)

「冬来たりなば春遠からじ」。この美しい日本語のよ
うに、厳しい冬を耐え抜けば春のしあわせが訪れます。
これがイエス様からのプレゼントです。そして主を仰
ぎ見る時、天から溢れんばかりのまばゆい光が注がれ
ていることを知ることができます。

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至
るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにあり
ますように。アーメン。

(ローマ 11・36)

小々馬 亜彦 (こごまつぎひこ)

東京都小金井市在住



永遠の光へ

小々馬 真理子



お孫さんの理子ちゃんと

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29:11)

これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。

(ルカ 1:78-79)

私は、一九三九年(昭和十四年)現在の中国、当時の満州の旅順で生まれました。

私の両親は明治生まれで、若き日にイエス様を信じ救われました。二人はこの共通点で見合いをして結婚したと聞いております。

当時、日本は国策の下、おびただしい数の日本人が

満州へ渡っていました。両親も新婚早々、満州に渡り、六人の子どもが与えられました。

両親は子どもの名前をすべて聖書から名付け、五番目の私にはヨハネの福音書十四章六節の「…わたしが道であり、真理であり、いのちなのです…」から、真理子と名付けられました。

当時の満州は、すでに日本人社会が形成されていました。日本人学校、病院、銀行、商店街、鉄道、教会までありました。父は新京満州中央銀行に勤務していました。

毎週日曜日には一家総出で教会へ行き、礼拝から夕方まで過ごしました。そのようなごく普通の生活も、昭和二十年を迎えると一変しました。第二次世界大戦の末期、満州にも想像だになかった悲劇が次々と押し寄せてきたのです。

昭和二十年、終戦は八月十五日ですが、そのわずか三か月前の五月末、中学三年、十五歳だった長兄が同

6人の証し

Unser Herr lebt

学年の男子百二十人全員と共に、ソ満国境の東寧へ勤労奉仕に出かけて行きました。国境へは、新京(現在の長春)から列車で三日もかかる距離でした。国境の大平原で麦刈り奉仕の最中、八月九日に突然思いもよらぬソ連参戦による空爆があり、一瞬のうちに一帯は修羅場と化してしまいました。何も知らない中学生たちは、ちりちりバラバラになって逃げまどい、兄はその後、の級友たちの証言から、逃亡の途中倒れて動けなくなってしまうと伝えられました。そして、十五歳だった兄は二度と再び我が家に帰ることはありませんでした。

兄が出かけて間もない六月、今度は銀行員だった父が招集令状によって招集されてしまいました。父は、戦争絶対反対を訴えましたが、「根こそぎ動員」ということで連れて行かれました。頼りとなる父、兄不在のまま、我が家は母子家庭になってしまいました。

弟が二歳、私は五歳でした。私たちが住む新京に次

のようなニュースが入りました。「まもなくソ連軍の攻撃が始まり、新京の街が全滅するからその前に疎開せよ」という命令が下されたのです。

母はその命令に従い、八月十三日、二歳の弟を背負い、五歳の私の手を右手に、七歳の姉の手を左手に、大行列に加わりました。

何時間もひたすら歩き続け、私の記憶は、ただただ眠くて、崩れ落ちるようにしゃがみこんでしまったことを覚えています。

八月十五日、ようやく疎開の目的地にたどり着いた時、日本の敗戦が伝えられました。皆、疲れて放心状態の中、ようやく戦争が終わったことを知りました。新京の我が家に帰るべく、またもと来た道を大行列に加わって歩き出しました。暗くなった夕方、土砂降りの雨に遭いました。眠くて眠くてしゃがみこむ私の手を母は決して離しませんでした。

もし、あの時母が私の手を放していたら私は今生き

船旅でした。

九州の佐世保港に着き、私たちは母の実家の東京杉並の祖母の家へ難民のような姿で転がり込みました。生死不明のまま兄は帰りませんでした。父は、終戦から四年後にシベリアでの抑留生活を終えて無事我が家に帰って来ることができました。

兄の行方を捜すにも、戦後長きにわたり日中の国交が閉ざされていたので、両親はNHKの「訪ね人」というラジオ番組を通して捜していました。このような経過を経て、私たち家族は戦後日本で生活するようになったのです。

生きてゆく過程で、私たち家族は、ただただ次の一点を悲しんでいました。すなわち、戦争に負けることが百パーセントわかっていただけなのに、なぜ日本はせめて半年前に降参しなかったのか、という一点でした。

あの戦争においては、我が家の悲劇などは海辺に広がる砂浜の砂の一粒に過ぎないけれど、せめて終戦の

ていない、と思うと感謝で涙が溢れます。

敗戦から引き上げまでの一年間、外地に住んでいた日本人の生活は過酷な日々でした。現地の日本人社会は、無法状態になり、中国人同士の内戦が始まって、家の中にいても窓を破って弾丸が飛び込んでくるという恐ろしい状況でした。そんな時にはみんなで押し入れに身を潜めていたのを覚えています。

押し入れの中で、母が歌を歌い始めました。

「主、我を愛す。主は強ければ、我弱くとも、恐れはあらじ。我が主イエス、我が主イエス、我が主イエス、我を愛す」の讃美歌でした。

新京には、中国各地から続々と日本人が避難のために逃れて来ました。街は収拾がつかないほど混乱に陥り、日本人学校は閉校になりました。我が家は、父、兄が帰らぬまま、終戦の翌年の昭和二十一年九月、引き揚げ命令により引き揚げ船に乗りしました。

私にとって、生まれて初めて見る日本への二週間の

半年前に日本が降参していたら、広島、長崎の悲劇も、中国残留孤児の悲劇も、起こらなかったのに、という悲しみを背負って生きていました。

この苦しみの中に、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。また彼らをまつずぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。…まことに主は渴いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。

(詩篇 107:6-7、9)

…そして主は、彼らをその望む港に導かれた。

(詩篇 107:30)

このみことばにあるように、イエス様が主人と私をあわれに思われ導かれた港が吉祥寺キリスト集会でした。イエス様は、さまよえる私たちの良き羊飼いとして緑の牧場、憩いの水のほとりに伴われました。みこ

6人の証し

Unser HERR leh

とはは生きて働き、たましいを生き返らせてくださいました。

悲しむ者から主を喜ぶ者に変えられました。喜びと共にイエス様が私に下さった最大のプレゼント、それは盲目だった私の心の目を開き、私自身の本当の姿を見せてくださったことです。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をそこしえの道に導いてください。

(詩篇 139:23-24)

光そのものであられるイエス様は、私のどす黒い心の隅々までその光で照らしてくださいました。イエス様の御前で降参するしかありませんでした。

祈りを聞いてくださったイエス様は、降参すべきは、実はこの私だったということを教えてくださいました。

の歳月が流れていました。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

(詩篇 23:6)

今、私はゆるがない天国への確信を持っています。イエス様は愛する家族との天国での再会を約束してくださいました。

私たちの国籍は天にあります。

(ピリピ 3:20)

日々の歌二三番「水晶よりも光る、いのちの水の」

一 水晶よりも光る、いのちの水の、
川のほとりにて、また会いましょう。
神様の川は、やさしくやさしく流れ、

「イエス様、ごめんなさい。お赦してください。どうか助けてください」。

私の心に本当の平和、すなわち神との平和が訪れました。

溢れんばかりの光が注がれ主を喜ぶ者に変えられた私は、嬉しくて嬉しくて感謝に溢れました。

もう一つのプレゼントは、私がいかに視野の狭い者かを教えてくださったことです。自分が自己中心、自我のかたまりだったことを気づかせてくださいました。戦争被害者のかたまりだった私をその悲しみから解放してください、主の前で自分こそどうしようもないほど視野の狭い者だと気づかされました。イエス様の御前にひれ伏して降参することによって、イエス様との平和が与えられました。

今は主から来るまばゆいばかりの光の中に生かされている毎日。感謝しても尽きることはありません。

今、静かに振り返る時、ここに導かれてから三十年

みんながまた集まる、その楽しさよ。

二 川のほとりには、いのちの木茂り、

こかげに語らい、主をたたえましょう。

神様の川は、キラキラキラ光り、
みんながまた集まる、その喜びよ。

三 そこでは涙も、苦しみもなく、

神様のそばで、静かにいこいましょう。

神様の川は、恵みが恵みがあふれ、
みんながまた集まる、その幸いよ。

四 光りが輝く、天の御国で、

神様のそばで、共に歌いましょう。
神様の川は、永遠のいのちあふれ、
主とともにいつまでもいるしあわせよ。

6人の証し

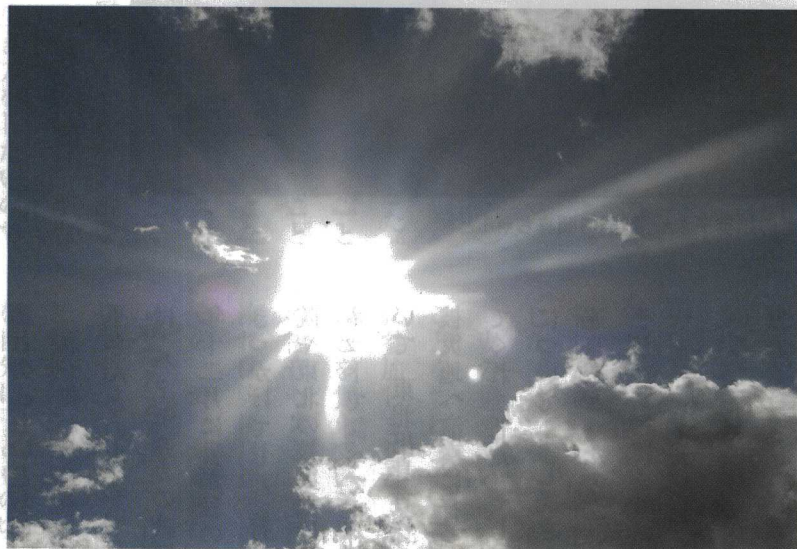
Unser Herr lebt

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の
川を見せた。
(黙示 22・1)

あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげるこ
とがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き
悲しむ日が終わるからである。
(イザヤ 60・20)

小々馬 真理子 (ここま まりこ)

東京都小金井市在住



主の家が私の居場所

田中 光荣



妻の結実子さん、長男の照真ちゃんと

妻との出会いと救い

私が救われるきっかけとなったのは、妻である結実子さんとの出会いからです。妻の勤めていた出版社は、ハーモニカの教則本を出版しています。二〇一三年十二月に妻が私の本の担当になったのが、知り合うきっかけでした。打合せの際に、私がアフリカの孤児院や東北の被災地に演奏に出向いていることを事前にネットで調べてくれていて、「私はチューバをやっている、東北出身者のメンバーとプラスバンドを組んで、被災地へ演奏に行っているのですよ」というお話をしてくれました。そしてある時に、被災地での演奏活動について、少し聞きたいことがあったので、個人的に連絡をとったのが、後にイエス・キリストによる救い、そして結婚にまで結びつく出会いの始まりでした。

いつもニコニコしている結実子さんともっといろいろな話をしてみたいと、頻繁にメールをするようになったころ、名前の話になり、「結実子という名前は聖

書からつけたもので、私はクリスチャンです」と言っていて、聖書のみことばを送ってくれました。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは二つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

(ヨハネ 12:24)

これが最初に聞いた聖書のみことばとなりました。「なんて素敵な言葉で、素敵な名前だ。僕の『光荣』という名前から、クリスチャンですか？」と聞かれることがたまにあります。読んだことはないけれど、何となく聖書には興味があつて、アフリカやニューヨークのハーレムの教会に行つたことがあります。それはとても素敵な思ひ出になっています。そんな会話が始まつてからは、聖書や信仰についての話もするようになり、妻は、「私は主に喜ばれる生き方をしたいので、

普通のお付き合いは出来ない」「一緒にいたいと思う気持ちもあるけれど、同じ信仰を持っていないと難しい」というような話をしました。一見、現状の自分を否定される内容ともとれましたが、私は逆に「こういう信仰心の厚い人は素敵だな」と、より惹かれていきました。

妻の集っている吉祥寺キリスト集会に行つてみたいことを告げ、二〇一四年六月に初めて礼拝と福音集会に参加しました。心がとても穏やかな気持ちになったことを覚えています。そしてその十箇月後には御代田の福音センターで洗礼を受けました。私にとってその流れは実に自然で、迷うことも疑問に思うこともなく、その一つ一つを喜び、そして大いに楽しんできました。「救われるまで本当に早かったね」と驚かれることもあります。私の中では、やっと自分の魂の居場所にたどり着けたのだという思いがあります。こういう場所を自分は子どもの頃から、ずっと求めていたのです。

6人の証し

Unser Herr lebt

主は私の羊飼ひ。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

(詩篇 23:1-2)

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。

(マタイ 5:3)

とはいえ、実際に集会に行くまでは正直戸惑うこともありました。「クリスチャンと一口に言っても、いろんな宗派とかもあるのではないか」「ややこしい組織だったらどうしよう」「昔、風呂無しのボロボロのアパートに住んでいた時に、いろんな宗教の勧誘がよく来て面倒な時があったな」と、そんなことも思い出しました。そして吉祥寺キリスト集会のホームページを見たのですが、そこには「牧師制度がありません」「組織、会則がありません」「会員制度がありません」「献金制度がありません」と無い無いづくしでした。「純粹に

聖書の真理だけを学び、伝える者の集いで、会員制度を持たず、いかなる組織にも属していません」と書いてあるのを読み、とても安心しました。いやむしろ、とても興味がわき、行ってみたいと思ったのです。

集い始めて間もない頃に、石神井公園の家庭集会で、ベックさんとお交わりをしました。まだまだ何もわからなかったので、お交わりって何？という状態で、何を、どんな話をすればいいのかさっぱりわかりませんでした。ベックさんが開口一番「聖書を読んで意味がわかる？」と聞かれ、どう答えて良いかわからず、もじもじしているときに「わからないよね、当り前だよ」と言われ、私は一気に肩の荷が下りました。イエス様ご自身のこととキリスト教は違うことや、イエス様は宗教ではないこと。キリスト教、宗教は後から人間が作ったものだ、とも言われました。これは私の中で非常にわかりやすく、とても安心しました。

しかし、礼拝に集っていても、しばらくはよくわか

らないキーワードだらけでした。最初は、皆さんの感謝のお祈りを聞いていても、ちんぷんかんぷんでした。あまり好ましくない意味で「肉の思いで…」というキーワードが出てくるので、「みんな肉が嫌いなのかな…」と考えたり、主をほめるとは何だろう？子どもは褒めて伸ばす、というのと同じことなのか？「どうしようもない自分ですが…」という言葉には、この人はそんなどうしようもない人なのかな？そんなふうには見えないけど…。罪人？なにか悪いことでもした人なのかな？どう見たって良い人にしか見えないのだけど…

…と思ひながら聞いていました。でも不思議なもので、しばらく集っていると、だんだん意味がわかってくるものです。意味がわかってくると、さらに楽しくなり、知っているみことばが出てくると、嬉しくなり、心に触れたみことばに鉛筆で印を付けてゆくことで、妻からプレゼントしてもらった自分の聖書にもどんどん愛着がわいてきました。

見よ。わたしは、戸の外に立つてたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(黙示録 3:20)

妻と出会う前、救われる前までの私

中学、高校生の頃から音楽に興味を持ち、楽器を始めました。子どもの頃から人見知りや激しく、どうも周りの人と上手く馴染めなところがある自分にとって、音楽は勇気と希望を与えてくれる大切な宝物となりました。自分を表現することが苦手だった私は「音楽で自分を表現する」ということを知ったことで、さらにのめり込み、手放せない必要なものとなりました。しかし、その頃を振り返ると、いつもひとりぼっちで寂しく過ごしていたことばかりが思い出されます。常に孤独感を感じていて、「自分の居場所はどこにあるのだろう」と、常に思い、常に探していました。その思

いをいつも音楽にぶつけてきましたが、心から満ち足りることはありませんでした。全ての人が羨ましく思え、自分を肯定的にとらえられず、疎外感を感じる日々が続きました。そんな私はいつの頃からか、音楽を仕事にして、ずっと続けていきたいと思い始めていました。音楽を仕事に出来たら、居場所が見つかるかもしれないと思ったからです。

あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。

(ヨハネ 16:22)

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

(ヘブル 13:5)

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあな

たを愛している。

(イザヤ 43:4)

その後にはプロの音楽家になりました。歩みは遅いものの、少しずつ状況は良くなっていき、若い時ほど、心が痛むような強い疎外感など感じることは少なくなりましたが、それでもなお「自分の居場所」を探していました。

そんな時、新天地を求めて二〇〇八年に一人で世界一周の旅をし、その際に何度か教会へ行く機会がありました。アフリカのウガンダや南アフリカ、ニューヨークのハーレム。初めて礼拝に参加したのがウガンダでした。このようなことは、かなり特殊な例かと思いますが、とても温かく受け入れてもらえて、とても嬉しい気持ちになったのを覚えています。特に思い出深いのが、ニューヨークのハーレムの教会でのことです。ちょうどクリスマスである十二月二十五日にハーレムにいました。クリスチャンの街は、日本とは正反対

でお店はほとんど閉まってしまい閑散としています。

行く場所もない私は、教会がたくさんあるハーレムの一角を独り歩いていました。とある教会の入口に、「クリスマスイベント開催中」のような掲示板を見つけ、それをポーツと眺めていたら、「あなたもおいで！」と声をかけてくれたので、中へ入ると、その人がいろいろな人を紹介してくれました。「どこから来たの?」「東京です」「エー、東京から来たんだー!それはよく来たねー!」この人は東京から来たんだってー!とみんなに声をかけてくれて、その場は大変なごやかな雰囲気になりました。どこの誰だかわからない私を、こんなに喜んで迎え入れてくれるなんて、なんて素敵な場所なのだろうと心がぽかぽかと温かくなったのをよく覚えていきます。ああ、私もこんなところへ集えるようになりたい。こういうところが自分の居場所になったらなんて素敵だろう。いつかそんな機会が訪れるといいな...と思っていました。

そして二〇一三年十二月に妻に出会い、二〇一四年六月に集会へ行き、二〇一五年三月に洗礼を受け、二〇一五年七月に結婚をしました。

太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる。あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はいかれない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。

(イザヤ 60:19-20)

これは、自分にとって最も大事なことです。妻が教えてくれました。主を信じて、お祈りをして、歩めばいい。それだけでいい。やっと自分の居場所を見つけた。それは子どもの頃から求めていた場所でした。

二〇一七年三月に長男が生まれました。「照らす」という言葉に、非常に心を動かされるものがありました

ので、その漢字を入れたと考えました。

すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようと
していた。
(ヨハネ 1・9)

このみことばからいただき、長男の名前は「照真^{てるま}」と
名付けました。そして二〇一九年二月に次男が生まれ
ました。いつでも福音に目を向けるように、という思
いを込めて「福志^{ふくし}」と名付けました。

妻と出会い、救われてからの私はいつも心穏やかに
楽しく毎日を送っております。この先も家族で手を取
り合い、主を見上げ、祈り、感謝し、日々をつつましく
も喜びながら過ごしていきたいと思っています。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事
について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあっ
て神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5・16-18)

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みと
が、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家
に住まいましょう。
(詩篇 23・6)

田中 光栄 (たなか こうえい)

一九七一年 東京都新宿区出身、新宿区立西戸山中学
校、東京都立千歳高校、ハーモニカ奏者

妻 結実子 (ゆみこ)

長男 照真 (てるま)

次男 福志 (ふくし)

あなたのみことばは、私の足のとも しび、私の道の光です

田中 結実子



夫の光栄さんと

私は幼い頃から母について集会へ行っていましたの
で、すべての創造主である神様が存在し、死んだら神
様のいる天国に行くのだ、ということに特に疑問をも
つこともなく育ちました。そして一九九二年小学生の
時に仙台のキャンプで洗礼を受けました。

私はその頃、学校でいじめにあっていました。とて
もおとなしく、引っ込み思案で、自分の気持ちを伝え
ることが大変苦手でしたので、何かされてもただニコ
ニコとして笑っており、沈黙していました。そのよう
な時、心の中で「イエス様、助けてください！」と祈る
ようになりました。この状況に、母から吹奏楽部に入
ることを勧められ、私は入部しました。楽器それぞれ
が違う役割を担い、ひとつの音楽をつくっていくので、
その中で自分も必要とされていることがとても嬉し
くて、厳しい部活ではありましたが、行くのが毎回楽
しみになりました。そのうち自然とお友達も与えられ、

主がきちんと備えてくださったのでした。

私が苦しみの中を歩いて、あなたは私を生かしてください。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってください。

(詩編 138:7)

高校受験で初めての受験の前に不安なまま受験日が近づいた頃、いよいよ応援メッセージをもらいました。そこには聖書の言葉も添えられていました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。私があなたの神だから。

わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。
(イザヤ 41:10)

この聖書の言葉を読んだときに、主ご自身が、今、私

に語ってくださっていると分かり、ものすごく不安だった心が、ふっと解放された感じがしました。このとき初めてはつきりと、主は私のことを何でもご存じで、その時に必要な言葉をくださり、守ってくださいる方であると実感しました。今まで遠くにいたお願いごとの神様が、いつも近くにいてくださり頼ることのできる神様に変わった瞬間でした。受験が終わるまで、いつもいつも心でこの聖書の言葉を繰り返し思っていました。そうすると大丈夫という気持ちが湧いてきて、平安になりました。

大学入学と共に愛知県へ引っ越すことになりました。大学受験の際も、お祈りや聖書の言葉に支えられ、主への感謝の気持ちいっぱい入学したはずでした。しかし、家族と離れて暮らすことになった私は、解放的になり、日常に流され、自然と主の事を忘れ、お祈りもすることがなくなっていました。主の存在を疑ったり、否定していた訳でもなかったもので、そのような自分の

状態に何とも思っていない感でしたが、主から離れて自分勝手な歩みをしていることに、主は悲しまれており、それも罪であることを後から知りました。用事を理由に集会に行くことをせず、どんどん月日がたつていきましたが、主は名古屋集会に行くきっかけを与えてくださり、そこへ集うように導かれました。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

(ヨハネ 15:5)

大学卒業後の数年間は、自分が思い描いていた生活と現実が全く異なり、仕事で上手いかないことや嫌なことがたくさんありました。吐き気や頭痛に悩まされ、辛い日々を過ごす時期もありましたが、その度に

聖書の言葉に励まされ、祈りへと導かれました。長い試験に感じましたが、信仰の成長の為に必要だったのだとは思いますが、祈りや賛美を歌っていると、「大丈夫だよ」と主の温かい腕に包まれているような気持ちになり、安心して涙ができました。

あなたがたの会った試験はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えることのできないような試験に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試験とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10:13)

社会人になって、自分の性質もより明らかになりました。私は自分を良く見せる事ばかり考えたり、とても「都合の良い人」でいたり、結局人を恐れ、人からの評価を第一にして、ただただ自分を守ることだけをい

つも考えて行動していました。イエス様が十字架にかけられる時、弟子たちに裏切られたり、知らないふりをされたり、民衆や兵士、権力者達にたくさん傷つけられた姿に、なんて酷いことをするのだと思っていました。私が、私も同じことをしている一人であったことが分かりました。そんな私の為にも、罪をすべて背負って十字架についてくださった主に感謝しました。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。
(イザヤ 53・6)

しかし、彼は私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちのために碎かれた。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちは癒された。
(イザヤ 53・5)

他にも妹の事をきっかけに家族でたくさん主の大きな御わざを見せて頂きました。

あなたには、すべてができること、あなたはどんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。

(ヨブ 42・2)

夫の光栄さんとは、二〇一三年十二月に会社で会ったのが最初でした。初めて彼の本を担当することになり、打ち合わせをしたのがきっかけで、担当終了後にもメールが来るようになりました。色々やりとりをしている中で、自分がクリスチャンであることや集会に行っていることを話すことがありました。それに対して、彼が海外に行つたときに教会の礼拝に参加したと、また行きたいと思つていること等を聞いて、何か求めている方ならば、主の元へ導かれたらいいなと、光栄さんの救いを祈るようになりました。

6人の証し

Unser Herr lebt

二〇一二年十一月、一番下の妹の病気をきっかけに、私は会社を辞めて名古屋から一時的に仙台に帰ってきました。しかし、この先どうしたらよいのか分からない状況に、主は進むべき道を示してくださいました。それは新たな職をみつけることであり、主はすべてを本当に短期間で進めさせてくださいました。実家が埼玉に移る可能性があったので、関東で探そうと思ひ、すぐに与えられたのが東京の勤め先でした。引越しはあつという間に整えられ、二〇一三年二月には新生活がスタートしました。大学卒業以来、音楽とは遠い場所にいましたが、仕事では楽器の教則本の編集業務などをおこない、仕事以外でも楽器を演奏する機会を与えてくださいました。

こうして全く知らない土地に突然行つたはずが、主が与えてくださった環境は、すべて私には充分であり、感謝に満ちていました。主は、私の思いをよくご存じで、すべては主から来たことをその時に感じました。

そうこうしているうちに、結婚を前提にお付き合いをとアプローチがありました。私はどうしたらよいかわからず、何も答えられずにいましたが、もつと祈ることを強く思われました。しばらくして、主が私に今まで何をしてくださったか等の過去の話や、結婚観については、同じ信仰を持つて一緒に祈りながら歩める人がよいと思つていること等、話す機会が与えられました。そして集会にお誘いしました。ここまではつきりと言われて、本当に嫌だったら来ないだろうと思つていましたし、それならそれが御心なのだと思います。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
(詩篇 37・5)

二〇一四年六月、光栄さんが集会に行つてみたいと言いました。礼拝、福音集会に参加した後、母や兄弟

姉妹と昼食を取ることになりました。彼とは別のテーブルにいた際、私達がお付き合ひしているのか聞かれました。なんと答えたらよいかわかりませんでした。そのとき自分の口からとっさに「結婚を祈っていきたい」と思っている方です」という言葉が出ました。まずは光栄さんの救いを祈ることはもちろんですが、結婚についてはなんだか祈ってはいけないことのように思うこともありましたし、「結婚と救いは別よ」と今までにも何度も何度も口すっぱく母より言われてきたので、母が「祈っていったらいいんじゃない」と言ってくれたとき、とても心が解放されました。このことは結婚への導きが始まったとても意味のある出来事となりました。帰りがけ、心がとても素直な状態になっていた。ので、このお昼の事を光栄さんに話し、これがお返事となりました。

それから私たちは一緒に集会へ行くようになりました

た。元々、彼があまりにも素直に主を受け入れているので、初めは私に合わせようとしているのではと疑いなくなるくらいでした。しかし、そうではなく、本当に主を求めているのだということが時間が経つにつれ、わかりました。二〇一五年三月に洗礼を受けることになり、七月の結婚にいたるまでも、あつという間に主が導いてくださいました。結婚が決まったとき、ベックさんは「善は急げ」とおっしゃいました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29:11)

二〇一七年三月長男が生まれました。毎日の育児は、幸せを感じる半面、想像以上に大変で思い通りにいか

ない事の連続です。ついつい感情的になってしまう事も多く、本当に自分の忍耐のなさ、愛のなさを痛感しています。反省と共に自分に嫌気がさすことがよくあります。その都度、主に祈り頼ることが出来ることは幸いです。「私から出る言葉、行動ひとつひとつが息子の成長の妨げとなりませんように。どうぞあなたの愛で息子の心を満たし、守り、成長させて下さい。」と主にお祈りする日々です。

これからもたくさんさんの事を通して壁にぶつかる事があると思いますが、その都度、家族で心ひとつに主にお祈りし、毎日感謝して過ごしていけたらと願っています。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。

これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ 5:16-18)

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。(詩篇 103:2)

田中 結実子 (たなか ゆみこ)

一九八四年生まれ 宮城県仙台市出身、愛知県立芸術大学音楽学部卒業

夫 光栄 (こうえい)

長男 照真 (てるま)

次男 福志 (ふくし)

6人の証し

Unser Herr lebt